

『ドラマ・ドクター』

川村 毅
2015年作

〈登場人物〉

ドクター(トーマス)

ヘンリー

トニー

アスラム

サラ

ヘルマン・プレミンジャー

初演 2015年10月23日〜21月2日 吉祥寺シアター10周年

ティーファクトリー公演 演出：川村 毅

出版 2016年5月 論創社「川村毅戯曲集2014-2016」収録

上演連絡先 ティーフアクトリー

info@tfactory.jp <http://www.tfactory.jp/>

東京都新宿区西新宿 3-5-12-405 Tel. 03-3344-3005

(2020年12月現在)

1.

どこかの国の、どこかの街。穴蔵のような書斎。ドクターが原稿用紙を前にして拳銃を手にしている。銃口をこめかみに当てて、トリガーを引く。弾は出ない。拳銃を置いて、万年筆を持ち、書き始める。

ドクター（書きながら）「どこかの国の、どこかの街。穴蔵のよ

うな書斎。男が原稿用紙を前にして拳銃を手にしている。銃口をこめかみに当てて、トリガーを引く。弾は出ない。拳銃を置いて、万年筆を持ち、書き始める。やがて人の気配を感じて、顔を上げる。」（書くのを止めて、顔を上げて）おはようございます。：書いています。もうすぐ書き上がります。今度こそ書き上げます。

誰もいない。

2.

どこか。ヘンリーとトニーが、キー・ボードを叩いて激しく書いている。

ヘンリー どうだい、トニー？

トニー なんだい、ヘンリー？

ヘンリー 書けたか、トニー？

トニー 書けたよ、ヘンリー。

ヘンリー 書けたのか？

トニー 冒頭のモノログだよ。

ヘンリー それなら、ぼくも書けた。

トニー 読んでみてくれよ。

ヘンリー なんてぼくが先なんだ？

トニー 普通、そうだよ。

ヘンリー 普通、そうか？

トニー 普通、そうだよ。

ヘンリー じゃあ、読もう。

人気者に失敗は許されない。何本もヒットを飛ばして、そのことを教えられた。ドラマの株式市場の真っ只中でぼくは生きている。

権力を持った人たちが、ぼくの株を買う。ぼくの株は上

がる。だが、それがずっと続くわけではない。権力を持った人たちも上場市場における株だからだ。その人たちの株が下がれば、ぼくにも影響が及ぶ。だから、ひとりに集中しないで、なるべく多くの人たちに自分の株を買ってもらおう。

株が上がると、得体の知れない人たちが、たくさん寄ってくる。その人たちは、ぼくが破滅して初めて正体を明かすんだろう。今のところ、得体の知れない人たちは、得体が知れないまま、ぼくを持ち上げる。ちやほやされるとそれなりに気分がいいので、その人たちと関係を断とうとは思わない。敵は作ろうとしなくてもできるものだから、誰にでもいい顔をしておくのが、大切なことだ。今のところ、ぼくの株は上がり続けている。もう一度言う。人気者に失敗は許されない。失敗すると株が下がって、人々がまわりから去っていく。株が下がらないために、書き続ける。そういうシステムのなかで、ぼくは生きていく。ぼくは今マンションのペント・ハウスから街の夜景を見ている。さまざまなドラマを掬い上げる。…
どうだい？

トニー

わからないな。

ヘンリー

わからないか。

トニー ぼくは、人気者じゃないからわからない。

ヘンリー 告白だよ。

トニー 自慢だな。

ヘンリー 君にはわからないんだよ。

トニー だから、わからないって言ってるだろ。

ヘンリー 言っとくけど、これはぼく自身じゃないからね。

トニー わかってるって。台詞のなかの一人称と作家は、別人だ。

ヘンリー そういうことだ。

トニー でも書いてるのは作家だ。

ヘンリー そういうことだ。

トニー だから、結局作家本人だ。

ヘンリー そういう話じゃないだろ。

トニー じゃあ、誰が台詞を書いているんだ？

ヘンリー 先を進めよう。君のを読んでくれよ。

トニー ぼくにも読ませるのか？

ヘンリー 普通、そうだろ？

トニー 普通、そうか？

ヘンリー 普通、そうだ。

トニー じゃあ、読ませてもらうよ。

ヘンリー 聞かせてもらうよ。

トニー いちいちうるさいな。

ヘンリー いいから読めよ。

トニー 命令口調だな。

ヘンリー 悪かった。聞きたいんだ。

トニー

：ぼくはシャツターの町に生まれた。閉ざされた町で育った。町にあった工場は閉鎖されて、にぎやかだった商店街は次々と閉店していった。通りはシャツターの壁となつて、スプレアの落書きとゴミとネズミの死骸と鬱屈とした感情たちを生んだ。

ぼくは本を読むのが好きで、いつでもどこでも本を読んでいた。読みながらシャツター通りを歩いていると、決まって鬱屈とした感情たちが寄つて来て、ぼくをからかった。ぼくの魂は、本のなかにいたから、なにを言われなくても平気だった。その態度が、行き場の無い感情たちをさらに苛立たせたのだろう。梅雨が明けた暑い日の夕方だった。シャツターが夕焼けのオレンジ色に染まっていた。行き場の無い鬱屈とした感情たちが、わらわら出て来て、本を取り上げて引き裂いた。ぼくの魂が引き裂さかれた。

ぼくはジャックナイフを取り出した。いつかこんな日がやってくるだろうと思つて、いつも携帯していたジャックナイフだった。

刺すのは、簡単だった。ぼくは感情を殺した子供だったからだ。すべての感情は本のなかに収めていた。だから、引き裂さかれた本から、封印されていたぼくの感情が飛び出したのだ。

オレンジ色のシャツターに血が飛んだ。それは黒く見えた。

幸いなことに死人は出なかった。そんなことがあってから、家族も学校の連中もみんな、ますますぼくを異常者として扱った。そういうわけだ。ぼくは、シャツターの町の異常者だから、世界の終わりに直面したとしても、どうということはない。…というわけだ。

ヘンリー
暗いな。

トニー
それだけ？

ヘンリー
理解したくないな。

トニー
それだけ？

ヘンリー
観客の声を代弁したんだ。

トニー
君は、観客じゃないだろ。

ヘンリー
君よりは観客の気持ちかわかってるさ。

トニー
本音が出たね。

ヘンリー
人殺しなんか見たくないさ。

トニー
人殺しのドラマはなくならないよ。

ヘンリー ドラマの人殺しは虚構だよ。

トニー 今のも虚構だよ。

ヘンリー 君の現実の過去だろ。

トニー 台詞のなかの一人称と作家は、別人だ。

ヘンリー そういうことだ。

トニー でも書いてるのは作家だ。

ヘンリー そういうことだ。

トニー だから、結局作家本人だ。

ヘンリー だから、君の過去ってことだ。

トニー ぼくは、書きたいことしか書きたくない。

ヘンリー それじゃ、通用しないよ。

トニー 君は書きたいことを書いてるんじゃないのか？

ヘンリー そういうのは処女作だけいい。ぼくは人に望まれるものを書いてる。ドラマはマスを獲得できなければ意味がない。

トニー やつぱり、共同執筆は無理みたいだな。

ヘンリー ああ。別々に書こう。

トニー それがいい。

ヘンリー 各々で書き上げて、プロデューサーに選んでもらおう。

トニー そうしよう。

ヘンリーとトニー、各々キー・ボードを叩き始める。

トニー

(叩きながら) ひさしぶりに街に出ると、路上は相変わらず人殺しの予備軍でいっぱいだ。老いも若きも、男も女も納得できない思いを抱えながら、人殺しの衝動を抑えるささやかな喜びを探して歩いている。ぼくは、書いているからその衝動を抑えられるのだろう。書くことは未だに犯罪に似ている。こんなことを言ってるから、ぼくは人気が出ないのだろう。

春には春の人殺しが出るし、夏には夏が発生する。秋になっておさまるわけではなく、冬は冬でやりやすい。死体が腐るのが遅いからだ。

そんな予備軍に向けてぼくはドラマを書こうとしているのだろうか？癒そうとも救おうともしていないぼくは、連帯を求める。冬の湖のような冷たい連帯。ぼくはハッピー・エンドは書けない。だから、いずれ熱い連帯を求める誰かに、殺されてしまうかも知れない。

ヘンリー

(叩きながら) オリジナルピクが終わったというのに、まだ時々、テロ警戒警報が鳴り続ける。どう警戒すればいいのか、わからない。街のみんなもそうだ。あちこちのスマホで警報が鳴るが、人々は何事もなかったかのように

に歩き続ける。何事もなかったかのようにしていると、本当に何事も無い。ただいざれ何事かが、取り返しがつかないような何事かが起こると誰もが感じている。

ぼくは、書く。楽しい物語、悲しい物語。でも、本当のことを言えば、もう街には喜劇も悲劇も通用しない。そのことをわかっていながら、わかっていないふりをして、ぼくは物語を書く。物語が現実の街に着陸してはいけないんだ。それは、人々の不安と向き合うことになってしまうから。

ハッピー・エンド。絶対にハッピー・エンド。これがぼくに課せられた使命だ。街角に降り立てば、あつと言う間に消えてしまう、カゲロウのようなハッピー・エンド。カゲロウは短い命だから、とにかく、たくさん、速く、物語を紡いでいかなければならない。物語を停滞させちゃだめだ。次から次へと、どこまでも走るんだ。このシステムの間では、止まらない者が神になる。神になりたい。

ふたりはずっとキー・ボードを叩きながら、会話を続ける。

トニー　　神になりたい、か？

ヘンリー 台詞のなかの「ぼく」がな。

トニー それは君じゃないのか？

ヘンリー とにかく前へ進もう。ヘルマンには、ぼくのほうから言
つとくよ。

トニー なにを？

ヘンリー 共同執筆を止めたことさ。

トニー ヘルマンって誰だ？

ヘンリー ぼくらのプロデューサーだろ。

トニー そうだった。ヘルマンに直接会って言うのか？

ヘンリー 会ったことはない。やり取りは全部メールだ。

トニー ぼくもそうだ。

ヘンリー ヘルマンに言つとくよ、神になるのはひとりだけでいいって。

トニー 自信があるんだな。

ヘンリー 当たり前だ。自信を持たなきゃ、生き抜けないさ。

ヘンリーとトニー、各々激しくキー・ボードを叩く。

ドクターの書齋。ドクターとヘンリー。

ドクター ちよつと君。

ヘンリー …。

ドクター 君。

ヘンリー …。

ドクター おい。

ヘンリー …。

ドクター ヘンリー。

ヘンリー あ。今呼びましたか？

ドクター ええ。

ヘンリー なんだか、ぼーっとしてしまつて。

ドクター だいじよぶかね。

ヘンリー わからなくなりました。

ドクター なにがわからなくなつた？

ヘンリー 台詞のなかの「ぼく」が自分なのか、このぼくが自分なのか。

ドクター 「このぼく」というのは？

ヘンリー (胸を押さえ) このぼくです。でも、「このぼく」の現実感が無くなってきました。

ドクター だいじよぶじゃないな。

ヘンリー ぼくは、どっちなんでしょう？

ドクター どちらだっていいでしょう。君は、ここでは書いている

ヘンリーで、書かれているヘンリーなんです。

ヘンリー そういうことか。

ドクター 忘れないでください。

ヘンリー たすけてください。

ドクター どうしました？

ヘンリー 道に迷って一歩も進めなくなりました。

ドクター そいつは、困ったな。

ヘンリー 読んでいただけただけでしょうか？

ドクターの前には原稿がある。

ドクター さつきもらったばかりです。

ヘンリー そうだった。

ドクター こんなに、書いてるじゃないですか。

ヘンリー 続かないんです。ぱたりと止まってまったく進まなくな

りました。こんなことは初めてです。

ドクター 以前もあつたような気がしますね。

ヘンリー そうだったかな。

ドクター ここに来るのはひさしぶりですね。

ヘンリー 七年ぶりです。

ドクター 七年間、連絡をよこさなかった。

ヘンリー 連絡のとりようがなかったんです。引越されたでしょう？

ドクター いや。

ヘンリー そうですか。

ドクター ずっとこの穴のなかです。

ヘンリー ここに來ると落ち着きます。あの頃のエネルギーがよみがえってくるみたいだ。ストーリーが次から次へと湧き上がったあの頃。

ドクター そうでしたかね。

ヘンリー ぼくはどうしたらいいんでしょう？

ドクター なにを書いてるんです？

ヘンリー わからないんです。

ドクター わからないまま書き出したんですか？

ヘンリー わからないんです。

ドクター あなたはなんでも書けるはずですよ。感動させるのが得意技でしょう。

ヘンリー 悪意がありますね。

ドクター あなたの大衆を魅了させる才能は絶大ですよ。私がかつて指摘した通りでしょう？

ヘンリー ぼくはいつも人に必要とされていたいんです。

ドクター 自信を取り戻すんです。

ヘンリー 文体を無くしてしまいました。

ドクター だから、なにを書いてるんです？

ヘンリー いままでになかった物語です。

ドクター もう一度言ってください。

ヘンリー これまでになかった物語です。

ドクター 少し変わりましたね。

ヘンリー どこにもない物語です。

ドクター また変わった。

ヘンリー そうですかね。

ドクター 頼まれたんですか？

ヘンリー はい。

ドクター どこからですか？

ヘンリー ラヴ・アンド・ピース社からです。

ドクター プロデューサーは？

ヘンリー ヘルマン・プレミンジャーです。

ドクター ヘルマン・プレミンジャー。

ヘンリー お知り合いですか？

ドクター よく知っている。この仕事は断ったほうがいい。

ヘンリー なぜです？

ドクター ヘルマンとは話をしたのですか？

ヘンリー メールです。

ドクター おやめなさい。

ヘンリー できません。契約を交わしましたから。

ドクター 違約金で済みますよ。

ヘンリー 嫌です。

ドクター すごい意気込みですね。

ヘンリー チャンスだと思ってるんです。このドラマを成功させれば、ただの人気者から本当の作家になれるんじゃないかって。

ドクター ただの人気者か？

ヘンリー 要するに使い捨てです。

ドクター 誰もが人気者になれるわけでもないのに。

ヘンリー 新しい才能が出てくれば、すぐに捨てられるんです。

ドクター 私はこの仕事を断ったほうがいいと言いました。このことをしっかり覚えていて欲しい。いいですか？

ヘンリー …はい。

ドクター (原稿を取り上げ) 私はなにをすればいいんです？

ヘンリー 読んでください。どこが悪いかを調べてください。

ドクター 基本診療ですね。

ヘンリー できることなら、ストーリーの進め方も…

ドクター 外科手術ですね。

ヘンリー お問い合わせします。

ドクター 最近大手術とはご無沙汰なんですがね。

ヘンリー 名医のメスさばきをもう一度見てみたいんです。

ドクター わかりました。では、まず触診から血液検査、レントゲン検査にかかります。

ヘンリー エコー検査もお願いします。

ドクター それは私の判断でします。隣室でお待ちください。

ヘンリー 失礼しました。（去る）

ドクターは原稿を読み始める。ほとんど一枚一秒ほどの速さ。アスラムが入ってくる。

アスラム 原稿が届いてるよ。

ドクター そこに置いてください。

アスラム （置いて）他人の原稿にばっかかかずらってんじゃねえぜ。

ドクター …。（読んでいる）

アスラム おれの書いたの、読んでくれよ。

ドクター 書いたんですか？

アスラム 書いてねえよ。

ドクター いつもこれですネ。

アスラム なめてんじやねえぜ。

ドクター 静かにしてください。

アスラム なんで、おれが静かにしていきやなんねえんだよ。

ドクター 他人の物語の最中なんです。

アスラム 誰のだよ？

ドクター ヘンリー・サイトー。

アスラム ああ、あいつね。あいつの劇はよく刑務所でもやってたよ。

ドクター アスラム、だから私は今ヘンリーの物語の最中なんです。

アスラム 他人の世話焼きばっかしやがって。

ドクター 私は医者なんです。いろいろな患者を診るのが職業なんです。

アスラム やめちまえよ。そんな仕事。(去る)

ドクター、読み終えて原稿を置く。ヘンリーが入ってくる。

ドクター タイミングがいいですね。

ヘンリー ええ。これはぼくのドラマですから。検査は終わりましたね？

たね？

ドクター ええ。

ヘンリー …。

ドクター どうしました？

ヘンリー 診察が怖いんです。

ドクター いきなりの宣告が来るんじゃないかということ？

ヘンリー 「どうでしたか？」と聞くのが、あまりにありきたりで怖いんです。

ドクター ありきたりが怖い？

ヘンリー ええ。

ドクター おかしな話ですね。あなたの特技はありきたりでしよう。

ヘンリー …。

ドクター あなたはありきたりで勝負して、ありきたりで勝ち抜いてきた書き手です。

ヘンリー で、これは、どうでした？

ドクター 相変わらず舌を巻く上手さですね。

ヘンリー この先は、どうすればいいんでしょう？

ドクター この調子で進めればいい。なにが不安なんですか？

ヘンリー それだと、プロデューサーの意向とは違ってしまふ。ずっと人が望むものを書いてきたつもりです。人が望んだものを期待以上に仕上げるのが、誇りでした。でも、今回のこれは、なにが望まれているのがわからなくなっ
てしまった。

ドクター 善し悪しの判断はヘルマンに任せればいい。あなたは、

あなたの物語を書けばいいのです。

ヘンリー ですから、書けないんです。ありきたりが怖くなってしまったんです。

ドクター それは、あなたにとって致命的だ。

ヘンリー 書かれていないものを書きたいんです。

ドクター どうですかね。

ヘンリー …。

ドクター どんなものでしょうかね。

ヘンリー は？

ドクター 私なりにこの先のストーリーを考えてみたんですがね。

あなたのプライドというものもあるから、どうしようか迷っていたんですが、読みたいですか？

ヘンリー プライドなどどつくに捨てています。

ドクター でも、以前とは違いますよ。

ヘンリー は？

ドクター 七年前と同じでは困るという意味です。あなたは今では人気者ですからね。私はあなたに診察結果を渡す。あなたは基本診察料としていくばくか置いていく。それだけでした。いつも、それだけでした。

ヘンリー ぼくは診察結果をもらう。いくばくか置いていく。ぼく

は書く。ヒットを飛ばす。ぼくにたくさん入ってくる。そういうことをおっしゃりたいわけ？

ドクター 診察後は、いつもナシのつぶてでしたからね。

ヘンリー わかりました。

ドクターは自分の原稿をヘンリーに渡す。

ヘンリー 今読んでいいですか？

ドクター どうぞ。

ドクターは違う原稿を取り出してページをめくる。ヘンリーはそれをじっと見ている。

ヘンリー それはなんですか？

ドクター 違う患者の原稿です。

ヘンリー 患者さんは、多いんですか？

ドクター 初心者からヴェテランまで。名前を言ったらびっくりするような大家も来てます。

ヘンリー それを聞いて少し安心しました。

ドクター 展開に行き詰まって死んでしまう人もいます。愚かですよ。登場人物の誰かを死なせればいいものを。今更あな

たには釈迦に説法でしょうが。あなたもさんざやってる
でしょう、ストーリーを転がすには誰かを死なせる。そ
れを作家本人が死んでしまっってはね。

ヘンリー …。

ヘンリー、読み始める。ドクター、読み続ける。競争しているか
のようにふたりが読む速度は速い。ふたりの原稿をめくる音が異様
に響き渡る。アスラムが入ってくる。

アスラム おい、今晚なに食うかね。昨日の残りのメンチはよお：

あ、ヘンリー・サイトー。

ヘンリー どうも。

アスラム あんたの劇、何度も見たよ。刑務所で見るのにはサイコ
ーだよ。カンドーしたよ。

ヘンリー ありがとうございます。

アスラム まあ、十五分もすれば、忘れる芝居だけだな。

ヘンリー …。

アスラム いや、十分だな。十分もつかもたないかだな。

ヘンリー ちよっと今忙しいんで。

アスラム 今忙しいの？

ヘンリー 読んでるんです。

アスラム 忙しい忙しいって人気者ぶってんじやねえよ。(去る)

ヘンリー あれは誰ですか？

ドクター 読んでる最中です。

ヘンリー 失礼。(自分のほうを読み出す)

ドクター (読みつつ) 人類の歴史と同じだ。同じところをぐるぐる回っている。

ヘンリー (読み終えた様子) …この程度か。

ドクター 読み終えましたか？

ヘンリー …こんなもんか。

ドクター は？

ヘンリー がつかりだな。

ドクター へえ。

ヘンリー ありきたりだ。

ドクター あなたの代わりに、ありきたりを書いたのですよ。

ヘンリー なにも新しくない。

ドクター 世間はあなたにそれを求めてはいません。

ヘンリー 変わりたいんだ。

ドクター よかった、おもしろかったで、十分に忘れられるものを、書いていればいいんです。あなたは望まれるものを書いていればいいんです。誰もがトニーのようだったら困るんです。

ヘンリー トニー！？トニーがどうしました？

ドクター 彼には書きたいことがある。

ヘンリー あんなの自己満足でしょう。

ドクター 確かに失敗作は、そうだ。彼の欠点は、失敗率の高さだ。

ヘンリー ぼくにはたくさんの観客がついている。

ドクター それが唯一の救いというわけですか。

ヘンリー 言い過ぎじゃないですかね。

ドクター あなたが、私に言わせてるんです。

ヘンリー 勝手なこと言いやがって…

ドクター お帰りください。

ヘンリー 帰ります。

去りかけるヘンリーに、

ドクター 原稿は置いていってください。

ヘンリー …。

ドクター 私の書いた分の原稿ですよ。そのまま持っていこうと

しましたね。いつもの手口だ。昔からの遣り口だ。気がつ

くと、私の原稿を持ち逃げしている。

ヘンリー 診察料は払っています。

ドクター デビュー当時、君のドラマで評価されたのは、私が書き

足した部分だった。次ぎの作品も、その次ぎのも。そして、君は立ち去って、なんの連絡もよこさなくなった。壁にぶち当たっていることは知っていましたよ。そろそろ来る頃だと踏んでいたら、思った通り殊勝な顔で現れた。しかも、七年前と同じ手口だ。私もなめられたものだ。いいか、ヘンリー。あなたの成功作は、私との共作です。そういうことなんです。それでいいんです。ひとりでもやれると思ったら大間違いです。今のあなたは傲慢なのです。

ヘンリー
うるさい！

ドクター
うるさい？

ヘンリー
なにがわかる！

ドクター
あなた、疲れていますね。

ヘンリー
あんたにおれのなにがわかる！（机を叩く）

ドクター
（びくりとする）

ヘンリー
どういう思いで書いているのか、あんたらになにがわかる。（机を叩く）

ドクター
あんたらって、あなた、いろいろな評判に疲れてるんですよ。

ヘンリー
わかってるのは、おれだけだ。（机を叩く）

ドクター
それこそ自己満足です。

ヘンリー あれはおれの作品だ。（机を叩く）おれのものだ！（机を叩く）おれのドラマだ！（言うたびに机を叩く）

ドクター （異変が生じる）

ヘンリー 本心からヒューマニズムを信じてるんだ！

ドクター 私もかつてはそうだった。

ヘンリー 偽善者なんて言うな！

ドクター 私は、言ってます。

ヘンリー 甘っちょろいなんて言うな。

ドクター ですから、私は言ってます。他の誰かが…

ヘンリー 人がひとりでも生きる希望を持てるように書いてるんだ！

ドクター けっこうです。でも、私は、苦しい…

ヘンリー 人を苦しみから開放させるのが物語なんだ！

ドクター いや、私は、苦しい。苦しい…

ドクター、激しく胸をかきむしる。

ヘンリー ちょっと、だいじょうぶですか？

ドクター、静かになる。

ヘンリー　え？（近づき）ドクター。（触れる）…マジかよ。

携帯電話を取り出すが、やめる。部屋を出ようとする。ノックの音。ヘンリー、焦る。ノックの音。ドクターの顔にサングラスをかけ、背後にまわって、まどついているマントに身を隠し、腕を出して二人羽織の態勢を取る。ノックの音。

ヘンリー　（ドクターの声色を真似て）どうぞ。お入りください。

トニーが入ってくる。

ヘンリー　（驚いて）トニー！

トニー　なにをそう驚いてるんです？

ヘンリー　いや別に。やあやあ、こんばんわ。

トニー　早すぎたでしょうか？

ヘンリー　早すぎたよ！

トニー　すみません。出直します。

ヘンリー　待て待て。いいからいいから。おすわんなさい。でも、あまり長居はすんな。

トニー　そのつもりはありません。いかがでしょうか？

ヘンリー　なにが？

トニー 読んでいただけただけでしょうか？

ヘンリー ああ。これね。読んだ読んだ。

トニー いかがでしょうか？

ヘンリー サイター。チヨールサイター。

トニー やっぱりそうか。ありがとうございます。失礼します。

(ドクターの前にある自分の原稿を取ろうとする)

ヘンリー 待て待て。検査結果を聞かないのか？

トニー 駄目というだけで十分です。(原稿を持ち帰ろうとする)

ヘンリー 待て待て。おれのほうで聞きたい。なにを書いたんだ？

トニー 読んだんでしょう？

ヘンリー 忘れちゃって。

トニー その程度の出来と言いたいんですね。いままでになかった物語を書いたつもりです。

ヘンリー 流行ってるんだな。

トニー 流行ってるんですか。絶望的だな。

ヘンリー 絶望的？

トニー みんなでそんなことにいれあげだしたら、世界が崩壊してしまふ。

ヘンリー そうは思わないな。希望だと思っただけだ。

トニー そんなふうには考えられません。

ヘンリー だから、暗いドラマしか書けないんだよ。

トニー

ヘンリー

トニー 暗いというなら、暗いものしか書けません、

ヘンリー 立派だね、君。

トニー 書きたいものしか書きたくないです。

ヘンリー 親の遺産はあるのか？

トニー ありません。

ヘンリー 家賃収入とか？

トニー ありません。

ヘンリー じゃあ、望まれるものを書かないとな。

トニー タコ焼き屋でもやりながら、書いていこうと思っ
ています。

ヘンリー そんな中途半端な根性のタコ焼き屋のタコ焼きなんざ、
うまくないね。

トニー おっしゃる通りです。ですから、いままでにない物語に
賭けてたんですが。

ヘンリー 同期にヘンリーがいたろ。

トニー ええ。

ヘンリー どう思うかね？

トニー 糞ですよ。悪いやつじゃないけど、書くものは糞だ。

ヘンリー あっそう。

トニー 直してから、また来ます。そうか、希望と考えることか。

(自分の原稿を取り上げようとする)

ヘンリー 待て待て。これは置いていけ。

トニー 持って帰ります。

ヘンリー もう一度読むから。

トニー 書き直します。

原稿をふたり取り合う。

ヘンリー ごめん。あんまし真剣に読んでないんだ。

トニー とにかく推敲しますので。

ヘンリーは、ドクターのマントから出てしまう。

トニー あ。

ヘンリー あ。元気かい？

トニー なんておまえがいるの？

ヘンリー なんておまえがいるの？

トニー 言ったらろう。

ヘンリー 聞いたよ。

トニー で？

ヘンリー で？

トニー で？

ヘンリー 劇が行き詰まってんだ。

トニー ドクターは？

ヘンリー ドクターは死んでるよ。

トニー なんで？

ヘンリー 突然苦しんで。

トニー こんなことしてる場合かよ。(ドクターを抱えて) 足持
って。床に移すから。

ふたりはドクターを床に横たえる。

ヘンリー 死体処理か？

トニー 生き返らせるんだよ。

トニー、胸骨圧迫を施す。

ヘンリー 人工呼吸はしないのか？

トニー それはちよつと。

アスラムが、やってくる。AEDを持っている。

アスラム どいたどいた。どけって言うてんだよ。(ドクターの胸

にパッドをつけて) ボケツとつたってんじゃねえよ。びりつとくるから、離れて離れて。もっと離れるよ、びりびりだぞ、びりびり。(シヨックボタンを押す)

ドクターは上半身を起こす。

ヘンリーとトニー おー。

アスラム あんまり、人の手煩わすな。こつちも暇ってわけじゃないんだから(去る)

ヘンリー す、すいません。

ドクター これはあなたの仕業ですか？

ヘンリー は？

ドクター これもあなたが書いたんですか？

ヘンリー ぼくが書いたのは、ドクターが死ぬまでです。

ドクター 金、金ってずいぶんと私を俗人にしてくれましたね。

ヘンリー すいません。

ドクター 謝ることはない。なかなか立派な自己批評ぶりでしたから。しかし、ここでトニーが登場するとはね。どう思いますか、トニー？

トニー びつくりしました。

ヘンリー ぼくもトニーが現れるとは思いませんでした。

ドクター 災難でしたね、トニー。

トニー ええ。

ドクター この展開をどう思いますか？

トニー わかりません。

ヘンリー 誰の仕業ですか？

ドクター おそらく、アスラムでしょう。

ヘンリー アスラム？

ドクター たった今 A E D で私を蘇生させた男です。

ヘンリー あの男がなぜ介入してくるんです？

ドクター 君たちに試練を与えているのでしょうか？

ヘンリー ぼくに二人羽織をさせたのが？

ドクター あの男もなかなかの頑固者ですからね。あなた自身はどう続けようとしていたんですか？

ヘンリー ドクターの死体を隠して、発覚を恐れつつ生活していく作家が描かれます。やがて、すべてを知っているという

売れないライターが現れて、彼をゆするんです。そこで

彼は売れないライターを殺してしまふ。

ドクター ありきたりです。

ヘンリー でもハッピーエンドで終わるんです。

ドクター それは一体何が勝利したということなのだろう？

ヘンリー わかりません。

ドクター その心の隙間をアスラムはつけこんだんです。君たち、
気をつけなさい。トニー、君もいままででない物語に取
り組んでるんですね？

トニー ええ。最初は共同執筆から出発したんですが。

ドクター それは無理に決まってる。

トニー おっしやる通りです。

ヘンリー やっぱり、おれは、降りる。(去る)

ドクター ひとりになったぞ。チャンスだ、トニー。君の物語を始
めましょう。

4.

ドクターとトニー。黙って座っている。

ドクター なにを黙っているのです？

トニー 待ってるんです。

ドクター なにを？

トニー 物語を。

ドクター 待ってたら降って来るとでも思ってるのですか？

トニー 待つしかないんです。

ドクター こうした展開に別段新鮮味は感じられません。

トニー さて、どうしましょう？

ドクター こっちが聞きたい。

トニー 今これを書いているのはぼくですね？

ドクター おそらく。

トニー ぼくが書いてるという証しを、どこで見いだせばいいのでしょうか？

ドクター それは書くしかないな。

トニー なるほど。ぼくの原稿読まれましたでしょうか？

ドクター 読まれました。

トニー いかがでしょうか？

ドクター 君の世界は独特過ぎます。

トニー わかっています。

ドクター 殺人者を出すのはやめたらどうです？

トニー いままでにない物語を書こうとしてるんです。

ドクター 殺人者はおおむね書かれていますよ。

トニー わかっちゃいるけど、やめられないんです。

ドクター そうですか。

トニー そうです。大勢の観客を獲得できる手口を教わりたいわけではないんです。

ドクター わかっています。

トニー どうにも先に進めなくなってしまうた。

ドクター 君もそうですか。

トニー ヘンリーと一緒にしないでください。

ドクター 嫌いなんですね。

トニー 彼には才能があります。行き詰まったと言っても、いずれひとりで解決できます。

ドクター 君にも才能がありますよ。ヘルマン・プレミンジャーは異なるふたつの才能に賭けたってわけだ。彼に認められたんだから、君たちは有望なことですよ。

トニー その期待に応えられていません。

ドクター なにを書きたいんですか？

トニー どこにもいない犯罪者を書きたいんです。

ドクター どこにもいないなら、書けませんな。

トニー いままでにない物語を書くとしたら、それしか方法が見つからない。

ドクター 君らしいですね。もつと気楽にやればいいのに。

トニー どうしたらいいのでしょうか？ドクター。

ドクター 待つしかありませんね。

トニー 新鮮味のない展開と言いませんでしたか？

ドクター 本当のことを言えば、我々はありませんに負け続けるこ

としかできないのです。ヘルマンが求めるのは、そうした敗北の展開かも知れない。

トニー それだったらヘンリーのほうが上手に書ける。やっぱりぼくは、待つしかないんだ。

ドクター …。

トニー …。(立ち上がって変な仕草をする)

ドクター なんですか、それは？

トニー 間を埋めてるんです。

ドクター 静かに待ってられないんですか？

トニー どうやら、そうみたいです。

ドクター 君はやっぱりサーヴィス精神を捨て去ることができませんです。こういう世界は向いてないようです。

トニー どうやら、そうみたいです。

アスラム、来る。

ドクター 厄介なのが現れたが、どうしますか？

トニー ぼくが呼んだんです。

ドクター ほほう。

アスラム お呼びでしょうか、旦那様。

ドクター ここに座って、現在の心境を語ってくれたまえ。

アスラム　なんで？

ドクター　この方のために。

アスラム　劇作家のアスラムです。なかなか数奇な人生を送っていません。

ドクター　トニーは、どこにもいない犯罪者を書きたいっていうんです。だから、ひとつ君の体験やらなにやらを話してやってくれませんか。

アスラム　いいですよ。でも、三時十分にはあがらせていただきます。数奇な人生を送ってますので。

トニー　劇を書いてらっしゃる？

アスラム　書いてらっしゃいます。

ドクター　アスラムは、死刑確定囚の劇作家なのです。

トニー　は？

ドクター　シャバでぼんぼん人の首を刎ねたんです。こいつは人間じゃない。

アスラム　ホワイト・タイガーかも知れません。

トニー　君、ぼくはそんなことは書いてはいない。

ドクター　『スキヤキソング』のメロディを聞くと、刎ねたくなるというのです。

トニー　そういうのは、やめてください。

ドクター　（歌う）

アスラム うーうー。苦しい。完璧には更生していないんですう。

トニー こういうシーンを作るために君を出したんじゃないっ。

アスラム …。

トニー 死刑の執行はいつですか？

アスラム 法務大臣に聞いておくれよ。あーあ、あと何本ドラマが

書けるんだろうなあ。

トニー まさに命懸けだ。

アスラム まあな。

トニー どんな感じですか？

アスラム なにが？

トニー 人を殺すっていうのは。

アスラム 大変ですよ。人間の体の大部分は血液だと思いき知らされ

ます。なんとって、あーた、血がドバドバすごいんだか

ら。臭いもすごいよ。やるもんじゃないよ。

トニー 殺した後は、どういう感じですか？

アスラム しばらくお肉が食べられなくなりましたが、いずれ慣れ

て牛丼もすぐに食べました。

トニー 死を待っているのは、どういう感じですか？

アスラム どうもこうもありませんね。

トニー 書いたものを読ませていただけませんか？

ドクター それはやめておいたほうがいいですよ。

トニー なぜです？

ドクター くだらないからです。

トニー …くだらない？

ドクター くだらないです。

アスラム くだらないです。

トニー ご自身の殺人のこととかを書いてるんじゃないんですか？

アスラム 最初はそれをミッシェル・フーコーの文体で書いていましたが、誰も喜ばないんで止めました。

トニー 誰が喜ばないんですか？

アスラム 他の死刑確定囚とか看守とか。難しくてわからないってんだ。それで、くだらないを書き出したら、みんな大喜びです。死を隣人に置いた人間たちに立派なドラマは要りません。

トニー そんな…

アスラム くだらないのが一番です。心が和みます。

トニー やめてください。

アスラム 殺人者に過大な期待を寄せると馬鹿を見ます。みんな、馬鹿ですから。

トニー いや、人が人を無いものにしてしまうという行為の謎にこそ、いままでにない物語の鍵はある。

アスラム みんなアホ面下げて税金食い尽くしてますよ。海に近い
刑務所だと食材が豊富です。

トニー ぼくのジャックナイフは何だったんだ？

アスラム あなた、殺してらっしゃる？

トニー いいえ。

アスラム そんなに言うんでしたら、ご自身で体験してみるといい。
なにかが見つかれば幸いです。

トニー そういうのは、少年の頃やりました。

アスラム もう一度確かめるんです。出せよ、ナイフを。

トニー ナイフ？

アスラム ここは腹を割って話しましょう。

トニー、ジャックナイフを取り出す。

アスラム ほうら、持ってた。

トニー (すぎるように) ドクター…

ドクター この展開は、作家として一皮剥けるチャンスかも知れま
せん。(『上をむいて歩こう』を歌いだす)

アスラム うーうー。やめておくれー。

ドクター (歌い続ける)

アスラム うーうー。

アスラム、トニーに迫る。

ドクター そうらトニー、閉ざされたシャツターが夕焼けに染まっていますぞ。

トニー うわー。

アスラムの腹にジャックナイフが刺さる。トニーはナイフの柄から手を離す。ナイフはアスラムの腹に刺さったまま。

トニー だめだ。だめだ。こんなんじゃ、だめだ！（去る）

ヘンリーが来る。

ヘンリー あの、やっぱり降りません。書き続けます。

アスラムはヘンリーに向かって、

アスラム たすけてちょうだい。

ヘンリーはアスラムを抱きとめる格好になる。アスラムが床に倒

れると、ヘンリーの手にジャックナイフが握られている。

ドクター 人殺しだっ！

ヘンリー へ？

サラが来る。光景を見て、

サラ おおっ！やっちゃったんだ。

ヘンリー 違う、違うってば。（とジャックナイフを振り回す）

サラ きゃあああああ！

ドクター、去ろうとする。

ヘンリー どこに行くんです？

ドクター いちいち理由がいるのか。

ヘンリー 昔、さんざつばら言われましたから。人物の登場退場には必ず理由があるようにって。

ドクター 理由がなくても去りたい人間はいます。（去る）

ヘンリー ったく、トニーの書くもんはいつもこんなふうだ。

サラ やるなら一突きでね。ざつくざくはやめてよ。

ヘンリー あ？

サラ だからざつくざくよ。十数カ所の刺し傷っちゅうのは嫌
よ。

ヘンリー なんで、おまえがここにいるんだよ？

サラ なんで、あんたがここにいるのよ？

ヘンリー これはまだトニーの世界なのか？

サラ 違うと思う。

ヘンリー おまえを登場させたのは、トニーじゃないのか？

サラ あたしは勝手に来たのよ。

ヘンリー だから、なんでだよ？

サラ 書いてるのよ。

ヘンリー なにを？

サラ ドラマよ。

ヘンリー は？

サラ ストーリーよ。

ヘンリー おまえが？

サラ 物語よ。

ヘンリー 女優の仕事はどうした？

サラ 書き出したのよ。

ヘンリー やめとけよ。

サラ ドクターは筋がいいって。

ヘンリー あの人は基本的にいつも褒める。

サラ 新作を依頼されたの。

ヘンリー 誰から？

サラ ヘルマン・プレミンジャー。もううれしくって。

ヘンリー …。

サラ なにを書いてもいいんだって。依頼されてる証拠ね。

ヘンリー いままででない物語とは、なにを書いてもいいってことじゃないだろう。

サラ なんて知ってるの？

ヘンリー おれは完璧に馬鹿にされてる。

サラ 馬鹿になんかしていませんから、殺さないでください。

ヘンリー おまえのことじゃない。ヘルマン・プレミンジャーだよ。

サラ あら、お知り合い？

ヘンリー おれたちに頼みながら、駆け出しのおまえにふってるってのは、どういうことだ。

サラ あんたも書いてんだ！

ヘンリー どういうことだ！

サラ 保険をかけたんじゃないかしら。

ヘンリー なめてんじゃねーぞ。

サラ わかった。それで競争相手のあたしを殺そうとしてんのね。

ヘンリー これは違うんだって。ちきしょう、柄が手から離れない。

張りついたみたいだ。

トニーが戻ってくる。トニーはヘンリーの手からジャックナイフをゆっくりはがし、しまう。

ヘンリー そうか。まだ君のストーリーのなかなんだな。

トニー たぶん。(アスラムを指し) この死体があるからね。

ヘンリー なんでサラなんか出したんだ？

トニー サラのことは知らない。

ヘンリー とぼけるなよ。

トニー よくわからない。登場人物が勝手に動き出すんだ。

ヘンリー 君もそうか。

トニー ああ。

ヘンリー おれもだ。

サラ びっくりね。ふたりともドクターに見てもらってるなんて。あたしみたいなペーペー専用って思ってたのに。

トニー 本当に書き始めたんだ。

サラ はい。

ヘンリー 女優はやめたのか？

サラ 他人の人生やってる暇ないって気がついたの。

ヘンリー 意外だな。

サラ どころが意外？ 忘れたの？ 最初にこの三人が出会ったの

は、劇作教室よ。

ヘンリー 不まじめだったな。

サラ そんなことないわ。

トニー 欠席が多かったな。

サラ モデルのバイトが忙しかったの。

ヘンリー 女優のほうが向いてるね。

サラ あんたにそんなこと言う権利あるの？

トニー 君に書きたいことがあるのか？

サラ 自分の人生を生きたくなつたの…（何かに気づき）誰？

いつの間にか、ドクターの椅子にひとりの老人が座っている。

トニー 誰だ？

ヘンリー どうしました、おじいさん？

ヘルマン ヘルマン・プレミンジャーです。

ヘンリー ヘルマン・プレミンジャーさん！

トニー あなたが！

サラ 年寄り！

トニー 失礼なこと言うな。

ヘンリー これはこれは、プロデューサー。

この場所を知ってらしたんですか？

ヘルマン 知らない者はいないが、みんな知らないことにしている。

それがこの書齋だ。

ヘンリー ドクターを呼びましようか？

ヘルマン 古くからの知り合いなので、けっこう。どうですか、皆

さん、書けたかな？

サラ 書けました！

トニー 書けたんだ！

ヘルマン なぜ、持って来ない？

サラ ドクターに見てもらってる最中です。

ヘルマン わたくしに見せなさい。

サラ ドクターにサイテーと言われたので、書き直しています。

ヘンリー 褒めないんだ！

ヘルマン おはよう、ヘンリー君。

ヘンリー おはようございます。

ヘルマン おはよう、トニー君。

トニー おはようございます。

ヘルマン 君たちの進捗はどうかね？

ヘンリー 共同執筆は止めて、各々書くことにしました。

ヘルマン 勝手なことすんじゃねえよ。

ヘンリー トニーがわがままなんです。

トニー　ヘンリーがゴーマンなんです。

ヘルマン　どうやら、ふたりでは無理なようですな。三人で共同執筆していただきたい。

三人　えっ。

ヘンリー　でも…

ヘルマン　デモはいらない。

トニー　あの…

ヘルマン　アノもいらない。

サラ　仲良くやろうよ！

ヘルマン　笑うことに飽きた。泣くことにも飽きた。感動することに飽きた。飽きることに飽きた。若いみなさん、わたしを楽しませてほしい。ハハハハハハハハハハ。（笑いながら去る）

ヘンリー　充分楽しそうだけだな。

トニー　楽しくないから、あれだけ笑えるんだ。

サラ　三人で書くなんて、うれしい。

アスラム、むっくり起き上がり、

アスラム　おれも一枚かむぜ。

ヘンリー　あんたはだめだ。

サラ いいじゃない。

ヘンリー どう思うよ、トニー。

トニー 残念だが、君の文体は物語を混乱させる。肌合いが違
うんだ。

アスラム 排除しようってんだな。

ヘンリー 君はひとりで書けるだろ？

トニー 数奇な人生だからな。

アスラム おめーたち全員、つまんねーんだよ。（去る）

サラ 彼はなんなの？

トニー ホワイト・タイガー。

サラ どっかから逃げてきたの？

トニー たぶん。最初はぼくのトラウマの象徴のつもりだったん
だが、なんだか途中で変になった。

ヘンリー 君の書くものはいつも自分のことだ。

トニー 批判されたな。

ヘンリー 批評だよ。

サラ さあて、さっそく、手のうち明かしあおうぜ。

ヘンリー 気分が乗らないな。

サラ 時間がないぞ、時間が。

トニー 締め切り、言われたか？

ヘンリー 言われてない。今日はやめとこう。おれは疲れたよ。

サラ 時間がないぞと、言われましたけど。

トニー いつまでに上げろってんだ？

サラ 知りません。ただ恐ろしく時間がないとだけ。

トニー やろう。やるしかないよ、ヘンリー。ジーサン、ぎやふんと言わせてやろうぜ。

サラ パソコン持って来なくちゃ。

トニー ぼくもだ。もう一度、ここで集合しよう。

三人、去る。

5.

アスラムがパソコンを持って入って来る。

アスラム どこ行った？てめーたち、どこに隠れた？

ドクターが入って来る。

アスラム トーマス、連中をどこに隠した？

ドクター 慌てるな。

アスラム おれは書き続けるからな。

ドクター どうぞ書き続けてください。！（驚く）

ドクター、気配に振り返る。自分の椅子に誰かが座っているらしい。ふたりにはそれが見えるらしいが、誰もいない。

ドクター アスラム。

アスラム ジーサン、また出てきやがった。

ドクター （椅子に向かって）おはようございます。：まだです。

あと少し時間をください。：はい。あと少し。

アスラム おまえ、書いてるのか？

ドクター 答えたくないね。

アスラム ぬけがけしようってんなら容赦しねえからな。ちきしよ

う。どいつもこいつもなめくさりやがって。

ドクター （問いに答えるように）はい、書いています。

アスラム てめーやっぱり書いてんだな。

ドクター …書いています。もうすぐ書き上がります。今度こそ書き上げます。

アスラム ちきしよ、あんな若造どもに先越されてたまるかかってんだ。連中なんざよりかっつてのおれは人気があったん

だ。おれの実力見せてやるからな。（キー・ボードを叩く）

6.

ヘンリー、トニー、サラ。

各々、パソコンを持って来ている。

ヘンリー さて、どう始めるか？

サラ ワンシーンごとに書き継いでいかない？

ヘンリー そうやっていって、おれたちは失敗した。

トニー 失敗した。お互いなにもかもが違い過ぎた。

サラ 歩み寄る努力つてのをしないのね。

トニー いずれどっちかが裏切る。

ヘンリー 自分はいいい子チャンか。

トニー どっちかがって言ってるだろ。

サラ 仲悪いのね。

ヘンリー そんなにでもないさ。

トニー そんなにでもない。実は見た目ほど悪くはない。だが、

文体もストーリー展開も違う。ばらばらでつながらない。

サラ つながらないままにしちやえば。

トニー それも考えた。

ヘンリー それも考えた。それこそが、いままででない物語じゃないかってね。だが、結局それは、いままででない失敗作だって結論にたどり着いた。

サラ なるほど。

トニー サラ、君の書いたものを読みたいな。

サラ 見せたくない。

トニー なにを書いたぐらい教えてくれよ。

サラ 男性はなぜ浮気をするのか。一緒にラーメンを食べただけで浮気と判断する女性の心理とは。なぜ売春はなくなるのか。人はなぜ他人のセックスを見たがるのか。ポルノ・ビデオに出る女性はなぜ自分のセックスを見せたがるのか。

ヘンリー 君が出るポルノ・ビデオを見た。

サラ それ、あたしじゃないわ。

ヘンリー 君だったよ。

サラ あたしじゃない。

サラ あたしがポルノ・ビデオに出た理由は、妹に見てもら

いたいためだったんです。

ヘンリー 出てるじゃないか。

サラ 死んだの。

ヘンリー あ？

トニー 死んだ？

サラ 妹。

トニー その話を書いたの？

サラ はい。

ヘンリー なんだかなあ。

トニー 聞かせてくれないか？

サラ (パソコンを開く) 誰かが不意に死んでも納得できてし

まう夏だった。

トニー いい出だった。

サラ こうしてると、昔の劇作教室を思い出すわ。

トニー ああ。

サラ なんで、あんたらはあたしを口説かなかったの？

トニー タイプじゃなかったんだらうな。

ヘンリー 気が乗らなかつたんだらうな。

サラ 意気地のない男たちね。

ヘンリー いいから、続けるよ。

サラ 八月の不吉さを少女の私は感じていた。少年はのんき者

だ。少女は少年のようにいつも陽気ではいられない。でも、少女がみんな、これから身にかかることの不吉さを知っているかというと、そうでもない。可愛さで大人たちをねじ伏せて指図できる幸せな少女は、鈍感さをプライドにして育っていく。きっとこのまま美しく鈍感な女になるであろう少女は、不吉さなど感じたことがないから、そこそこ幸せではない少女の予感など無視して遊びに誘う。そこそこ幸せではない少女である私は、不吉な夜だと思いつつながら、幸せな少女の明るさに気圧されて、夜の川べりに向かう。そこでは、幸せな少女たち、そこそこ幸せな少女たち、そこそこ幸せではない少女たち、どこまでものんきな少年たち、あきれるほど馬鹿な大人たちが集まって花火を楽しんでいる。

夜の暗い川に極彩色の火の粉が映っている。私が持たされた棒からも銀色の炎の粒が飛び散っている。二十連発の打ち上げ花火が始まって誰もが空を見上げている時、私のすぐ隣にいた妹が燃え上がった。妹と私の叫びは、華やいだ夜のいろいろな音にかき消されていた。火はゆかたの裾から広がった。化学繊維製の安物のゆかただったから、火はあっという間に小さな体を覆った。五歳だった。私は叫ぶ以外なにもできなかった。いや、叫ぶこ

ともできなかったのかも知れない。私はなにもできなかった自分を少しでも正当化しようとして、声も出せなかったのに、叫ぶ以外なにもできなかったと記憶の修正をしているに違いない。

妹は、私の目の前で燃えた。誰の花火の火がゆかたの裾に引火したのかは未だにわかってはいない。わからないことになっていくが、私は見ていた。それはその夜、私と妹を誘った幸せな少女の花火だった。幸せな少女の曼珠沙華のような花火の火が、妹のゆかたに移るのを私は見ていた。見ていたのに、なにも言わなかったのは、幸せな少女の幸せな力に私が負けていたせいだ。私は思った。私の一言で幸せな少女は幸せでなくなってしまう。そういうことなら、そこそこ幸せでない私たち姉妹が、不幸せになっただほうが楽だ。

大人になった私は妹に申し訳なく感じて、したくもないセックスをして、他人に見てもらおう。一番見てもらいたいののは、妹だ。妹がそれを見て喜んでくれたらと願っている。

幸せな少女は、今はあの夜のことなどすっかり忘れて、幸せなままであるに違いない。

…おしまい。

トニー 終わり？

サラ もうしゃべりたくない。

ヘンリー そうだろうな。

サラ 私の罪です。

トニー そうは思わないね。

サラ 私の火花が友達の妹に引火したんです。

トニー 友達の妹？

サラ このなかの、幸せな少女が、私です。

ヘンリー なるほど。

サラ 物語のなかの「私」が自分だとドクターには説明しました。妹を失った「私」という、そこそこ幸せではない女の再生の物語。ドクターはすぐに嘘を見破りました。私は、自分をそこそこ幸せでない少女と設定して罪から逃げようとした。

トニー その設定で初めて書けたということだろ。

サラ 自分が許せなくなつた。たいして不幸でもない女が、不幸な女を書くのは、許せない。

トニー 君は幸せなの？

サラ 残念だけど、そこそこ幸せです。

トニー どこが？

サラ なんとなく。

トニー

君は全然幸せじゃないと思うけどな。

サラ

だったら、やっぱり嘘ばっか書いてる。

トニー

それを嘘だというんなら、ぼくだって嘘だらけだよ。(パソコンを開く)ぼくは、閉ざされた町から物語を始めた。

現実にぼくが育った町がモデルだから、ストーリーの

「ぼく」はぼく自身だろう。町で孤立しているぼくは、

閉ざされたシャッターの前で、人を刺すことになってい

るが、実際は逆だ。ぼくは刺していない。刺されたんだ。

いじめの果てにナイフで刺されたんだ。よく生きてるも

んだ。

いじめられたの？

トニー

ああ、想像を絶するいじめさ。いじめられた人間は、こ

の形容が得意だ。「想像を絶する」いじめ。なぜあんな

にまで嫌われていたのか、大人になってやっとわかつ

た。ぼくが嘘つきだったからだ。でもその時は自分が嘘

をついているという自覚はなかった。ぼくはいつも想像

の物語のなかに漂っていたからね。想像した物語のなか

での真実を現実で言うと、嘘つき扱いされるんだ。その

嘘でぼくは幸せになるが、幸せそうなぼくをまわりは許

せなくなる。ナイフで刺したやつはぼくを殺そうとして

いたんだろうけど、ぼくは死ななかった。それからぼく

は対人恐怖症になった。二十歳になってやっとそれを克服したが、今でも護身用のジャックナイフを持っていないと外出できない。死ななかつたぼくは、刺された自分を書きたくはなかつた。逆に加害者に仕立て上げた。いままででない物語を完成するには、いじめられっこの物語は平凡過ぎるからね。

ヘンリー　　そういう計算があつたとはなあ。

トニー　　ああ。

ヘンリー　　そこまでは読めなかつたよ。

トニー　　そうだな。

ヘンリー　　トニー君ときたら、愚直なまでに生真面目な作家の仮面をかぶってはいるが…

トニー　　仮面とはまたナイーヴなこと言うね。

ヘンリー　　君のことを誤解していたかもな。

トニー　　誤解していたな。

ヘンリー　　うぶなやつだと思つてたけど、うぶなのはおれのほうだ。

トニー　　うぶなほうが人気が出るって証拠だな。そこそこ田舎者のほうが好感度は高い。

ヘンリー　　言つてくれるねえ。

トニー　　言つてやったよ。

ヘンリー　　トラウマの安売りはやめろよ。

トニー そのまま書いてるわけじゃない。

ヘンリー トラウマの捏造の安売りはやめるよ。

トニー ほらね、こうやって嫌われていたんだ。

サラ のんきな少年にはわからないのよ。

ヘンリー じゃあ、トニーはなんなんだ？

サラ この人は、不幸せな少女。

トニー ありがとう。

サラ 不幸せな少女は、物語を紡ぐことでしか救われない。

ヘンリー どういつもこいつもトラウマ、トラウマ！おれはトラウマ

を物語の動機にしないからな。

サラ のんきな少年のままでないな。

ヘンリー 本当のことを言おうか？

トニー つてことは今まで言ってたこと全部嘘なんだ。

ヘンリー おれだって人を殺してるんだ。

トニー ……出た。

サラ 出ましたね。

トニー こういうのをヘンリーの口から聞きたかった。

ヘンリー 告白が続くな。やっぱりやめところ。

サラ やってよ。

ヘンリー 嘘かも知れないぞ。

トニー 誰に向かって言ってるんだ？ぼくたちは劇作家だぞ。

ヘンリー 中学校三年だった。

サラ 傷つくには絶好の時期よ。

ヘンリー 映画と落語が好きだった少年は、要領がいいから勉強もよく出来たよ。

トニー 今と変わらないんだな。

ヘンリー 要領がいいから、クラスでいじめが始まっても、適度にいじめるほうにすることができた。直接手は下さないが、そばで適当に大将を囃し立てる役割さ。いじめの大将はジャックっていったな。ガキの世界は大人の競争社会と同じくらい熾烈だ。いついじめられるほうになるかわからないから、油断ができない。いじめられないポジションを維持するのに必死さ。ジャックたちのいじめを見て見ぬふりをする時もあつた。最低な態度だけど、見て見ぬふりつても必死さ。のんきな少年の現実は、見えないところで大変なんだ。ヘンリーは、閉ざされた町でトニーをいじめる一群のひとりだったのかも知れない。

トニー 勝手にぼくを出さないでくれよ。

ヘンリー そう川。サラ、おれも川だ。不吉な場所はいつも川辺なんだな。おっと、しかも八月だ。サラ、おれも八月だったよ。川辺にトニーを呼んでね。ジャックを中心に六人

が、いじめられっ子トニーを呼び出すわけさ。

トニー
ぼくを出すなよ！

ヘンリー
不吉な予感がしたな。無視してりやいいのに、またトニーがこのこ来るわけさ。いじめられっ子ってのは、なんで柔順なんだ？

トニー
ひとりでいるほうが逆に怖いんだ。

ヘンリー
トニーはジャックが命じた金額の金を持って来なかった。なぜだとジャックが聞くと、トニーはいつものように嘘の言い訳ばかりを並べる。ジャックは川を向こう岸まで泳いで渡れと命じた。そうすれば許してやると。しばらくの間、みんな黙った。トニーがヘンリーを見た。大勢いるなかで、なんで自分を見るのか、ヘンリーにはわからなかった。ヘンリーに向かって言った。

「おれ、いつてくるわ」

川は広がった。トニーは川の真ん中辺りで消えた。トニーの最後の顔が忘れられない。特別にトニーと親しかったわけではなかった。でもトニーはあの時、ヘンリーだけは違う存在だと思ってくれてたんだ。ヘンリーは「行くな」と言いたかっただが、言わなかった。言ったら最後、今度は自分がトニーの立場になるとわかっていたら。

サラ 書くべきだわ。

ヘンリー 書かない。

トニー 当たるぞ。

ヘンリー おまえらとは違う。

トニー 物語は商品だよ。

サラ トニーがそんなこと言うとはね。

トニー ここは競争原理が支配した世界だよ。

ヘンリー その通り。

トニー トラウマも商品だよ。

ヘンリー その通り！

サラ そうは思いたくはない。ヘンリーはそれを商品にしてな

いけど、人気者になりました。

トニー それで今は壁にぶち当たってる。

ヘンリー その通り！

サラ あたし、やめるわ。

ヘンリー 降りるのか？

サラ これに関わっていると、なんにも書けなくなっちゃう気がする。

トニー 確かに：

アスラムが来る。

ヘンリー 誰がまたこいつを出したんだ。トニー、おまえか？

トニー まさか。ぼくはもうすっかり懲りた。

アスラム てめーたちや若者は、またなにぐだぐだほざいてやがんだ？

サラ あたしたちもう展開が、ぐだぐだなの。

アスラム ひとつ、おいらに相談してみろよ。

三人 …。

アスラム 黙りやがった。劇作家どうし腹割って話そうぜ。

サラ 劇作家なの？

アスラム 今までなんだと思ってたんだ？

サラ ホワイト・タイガー。

アスラム 正しい。

サラ どっから逃げてきたの？

アスラム トーマスの頭んなかから。

サラ トーマスって誰？

アスラム そんなこたあ、ここじや置いといて、てめーたちや、どこまで書いたんだ？

ヘンリー 見ての通り。ここまでだ。

アスラム 展開してねーな。

サラ 展開させて。

アスラム そんなこと言うと、おいらは頭のトンガリから足の爪先までマジになるぜ。いいのかい、ネーチャン？

サラ いいよ。

アスラム よーし。やってやろうじゃねーの。

トニー ぼくはもう帰る。

アスラム なんだと？唐変木。

トニー あんたとはつきあいたくない。

アスラム 警報が聞こえなかったか？

トニー 警報？

アスラム テロ警戒警報だよ。官庁に爆弾が仕掛けられて、街はパニック状態だ。

トニー ヘンリー、君、書いてるな。

ヘンリー 違う。

アスラム おいらの世界だよ。どうでい？ひとたびテロだの戦争だの起こりゃ、民衆は人が書くドラマなんぞに関わる暇もなくなる。てめーたちのアリンコみたいなドラマなんざ、ひとたまりもねえ、ふつとんじまう。どうせそんなもんなんだからよ、そんなもんだと思っ書いてみる。肩の力抜け、おたんこなす。

トニー 様子を見て来る。

アスラム 出るんじゃねえ、ボケナス。

アスラムは拳銃を取り出す。

アスラム ここにいる。

トニー …。

アスラム ハハハ、なにをおびえてるんだ、トニー。（拳銃を振つて）小道具だよ。教わらなかったか？ 忘れたか？

アスラム、トニーに拳銃を握らせる。

アスラム 様子を見て来る。（去る）

ヘンリー 拳銃か…

トニー たぶん、同じことを考えてると思うんだけど。

サラ セーの。

ヘンリーとトニー 展開が詰まった時は、登場人物のひとりや二人を死なせる。

トニー、ヘンリーに銃口を向ける。

ヘンリー そうきたか。

トニー まさか。（ヘンリーに拳銃を渡し）ぼくを殺せよ。ぼく

が物語の犠牲になる。

ヘンリー かつこよすぎないか。

トニー 自分でもそう思った。

ヘンリー 誰かが誰かを撃つにしても、物語が必要だな。男ふたりと女ひとり、か。

サラ 古典的三角関係やるしかないっしょ。

ヘンリー 降りるんじゃないのか？

サラ 無理っぽいっしょ。こうなったら、あたしの取り合いしかないっしょ。

ヘンリー 気が乗らないな。

トニー ああ。気が乗らない。

サラ なによ、あんたたち、いかさないわね。

ヘンリー いいなあ。今の台詞。もう一度、早口で言ってみてよ。

サラ なによ、しけた顔して。あんたたち、いかさないわね。

ヘンリー いいよお。

トニー ロシアン・ルーレットでいこう。

サラ なんでロシアン・ルーレット？

トニー 理屈はいらない。不条理でいこう。

トニー、ヘンリーから拳銃を取り、あつと言う間に銃口をこめかみに当ててトリガーを引く。

ヘンリー (慌てて) おい。

サラ (ヘンリーと同時に) あ。

弾は出ない。

トニー 次ぎは誰だ？

ヘンリー、トニーから拳銃を取り、額に銃口を当ててトリガーを引く。弾は出ない。サラに拳銃を渡す。

サラ 顔がぐちゃぐちゃになるのは嫌だから。(銃口を腹に当てる)

トニー 中途半端で痛いぞ。心臓だよ、心臓。

サラ、心臓の辺りに銃口を当て、トリガーを引く。弾は出ない。

サラ 心臓に悪いわ。

トニーが拳銃を奪い取る。

トニー めんどくさいな。(何度もトリガーを引く)

サラ やめてよ!

トニー (トリガーを引き続け) 弾が入ってない。(さっきのサラを真似て) いかさないわね。

サラ どこ行くの?

トニー 様子を見て来る。

ヘンリー 行かないほうがいい。

トニー 止めるんだな。

ヘンリー 行くなよ。

トニー ジャックの子分の時は、言えなかったからか?

ヘンリー 行くなよ。

トニー だいじよぶだよ。アスラムも行ったんだから。

ヘンリー じゃあ、おれも行くよ。

サラ その武器は置いてったら。

トニー なんで?

サラ 巻き込まれたら困るじゃない。

トニー 巻き込まれたら困るから、持って行くんだろ。

サラ 弾なしを?

トニー …。

トニー、拳銃をサラに渡す。

トニー、ヘンリー、出て行く。

7.

ひとりになったサラ、キー・ボードを叩く。

サラ

失われた時代を、私たちは生きています。失われた時代を、死んだ人間たちが支えている。死ねなかった人間、死ななかった人間は死んだ人間によって生かされている。失われた時代の私たちは、死んだ人間を抱えている。街は黄昏の色をしているけど、いつもそれがやけにきれいなので、みんな不思議に受け入れている。

ドクターに初めて会った時、ドクターは聞いて来た。

「あなたは、あなたのせいで死んだ人間を持っていますか？」

「持っていません」と私は嘘をついた。

「そういう人に物を書くことはできません」とドクターが言うので、私は反論した。

「それは、そんなことを言っただけで自分を正当化して慰めて

いるに過ぎません」

ドクターは言った。

「それでも思っていないければ、やっていけない人生ってやつもあるんだよ」

私は言う。

「傲慢ですね」

ドクターは言った。

「物書きなんて傲慢に決まってる。『戦争が起きた』と一行書けば、そうなるんだ。傲慢極まりない」

「それでも私は作家になりたいんです」

「それなら一行書いてごらん。それでこの世界が君のものとして少しでも動けば、素質があるってことだ」

私は書いた。残酷な愛のドラマ。私は、私に似た主人公をいじめ尽くす。書き出しは、「街角にまぼろしの市街戦が起こる」

8.

ヘンリー、トニー、アスラムが入って来る。ふたりはアスラムの

自動小銃を突きつけられている。

アスラム うろちよろしやがって。

ヘンリー うろちよろしてないよ。

アスラム のこのこ出てきやがって。

トニー のこのこしてないよ。

アスラム てめーたちのせいで、戦いの展開がぐだぐだになっちまった。てめーたちってのは、とことんこういう奴らだ。

ヘンリー 混乱した街を見ようと思つて。

アスラム 冷やかしか。

トニー 書こうとしたんだ。

アスラム 書けるわけがないだろがっ。おめーたちには、ぬくぬくした物語しか書けねえ。このぬくぬくした世界では、ぬくぬくした物語が求められている。(ヘンリーを指し示し) おめーは、嘘の物語ばかりを書いている。嘘の男女の愛を書き、嘘の夫婦の愛を書き、嘘の親子の愛を書き、嘘の兄弟の愛を書いた。嘘の人類の愛を書いた。人類ばかりではない、動物との愛を書いた。愛を書けば、ここじゃ商売になる。

ヘンリー おれは必死だ！

アスラム 反論すんな。ぬくぬくしてろ。(トニーを指し示し) 次

ぎはおめーだ。おめーの罪はもつとはっきりしている。人間の闇と称して人殺しばかりを書いている。ぬくぬくしててめーたちが人殺しを書くんじゃねえ。おいらの世界じゃ、人殺しは命懸けだ。ぬくぬくした世界が、大義のないぬくぬくした人殺しを生み、てめーたち、甘ったれた書き手は、意味のないぬくぬくした人殺しを書いて、ぬくぬくした人殺しどもを正当化している。

トニー 変わろうとしてるんだ！

アスラム ここにいる限り、変わることはできない。跪け。

ヘンリーとトニー、跪く。

アスラム モニラセ・セイスハ。モニラセ・セイスハ。こいつらは、資本家が放った作業員。作業員は物語を作る。民衆は資本家の家畜。家畜の餌はおいしい物語。それを作るのが、こいつらだ。目覚めよ、民衆！罪人に処罰を！まずはこいつから！

アスラム、出刃包丁を取り出し、トニーの喉に当てる。

トニー ああーっ！

ヘンリー ひいー！

ヘンリーは逃げる。サラは拳銃を撃つ。なぜか弾が出る。アスラムは撃たれる。

アスラム ひとつろしーっ！（倒れる）

ヘンリー たすかった、たすかった。

トニー ヘンリー、おまえ、逃げたな。

ヘンリー （倒れたアスラムに）てめえ、またこんなストーリー書きやがって。

サラ 書いたのは、あたしよ。

ヘンリー サラ：

サラ だからご都合で弾も出たってわけ。

トニー サラ、君がか。

ヘンリー おれはこんなふうな人間ってわけか。

トニー おれたちはこんなふうな作家ってわけか。

サラ なに深刻な顔してんの？ただの物語じゃない。嘘よ。虚構よ。

ヘンリー この穴蔵じゃ、現実だ。

サラ この現象はこの穴蔵のせいじゃなくて、あたしたちの欠落のせいじゃない？

トニー 確かに、ここに来てから現実を欠落させている。

ヘンリー 欠落しているのは、物語だよ。おれたちが物語で埋めないと、現実がないんだ。

トニー ぬくぬくした現実しかないけどな。

ヘンリー (サラに) おまえのことがわかったよ。

サラ 私のがわかったというのです？思うんですけど…

ヘンリー もうなにも思わないよ。書くなよ。

サラ 私が書くのは勝手です。

トニー モニラセ・セイスハってなんだ？

ヘンリー やめろよ！

サラ どっちもないのかも知れない。現実も物語も。グローバルでヴァーチャルな無重力空間。だから、私たちは幾通りもの結末を用意しておかなければならない。

トニー モニラセ・セイスハ。

ヘンリー うるさい。(トニーを殴る)

トニー 君は自分が成功すればそれで満足なんだろう。

ヘンリー 君は成功が欲しくないのか？

トニー 欲しい。でもその前に救われたい。

ヘンリー 救われたい？

トニー 自分自身が救われたいんだ。

ヘンリー ひとりでやってくれ。他人を巻き込むな。

トニー 他人を巻き込みたいんだ。そうじやなきや書いている意味がない。でも、やられたな。サラ、やられたよ。モニラセ・セイスハだつてよ。ハハハハハハ。

ドクターが入って来る。

ドクター アスラム。

アスラム (起き上がり) つたく、若者との飲み会はくたびれるよ。

(去る)

ドクター さて、どうしたね？

ヘンリー …。

トニー …。

サラ …。

ドクター これからどうするつもりかね？

ヘンリー …。

トニー …。

サラ …。

ドクター だんまりの不条理。もしくは不条理のだんまりか？…誰か応えてくれないかな？

サラ 質問。

ドクター どうぞ。

サラ　　ドクター、あなたは誰なの？

ドクター　聞きたいのか？

サラ　　ええ。

ドクター　聞いてどうする？

サラ　　物語にします。

ドクター　君たちには君たちの物語があるだろう？

サラ　　ありません。グローバルでヴァーチャルな無重力空間に
います。

ドクター　それもまたなかなか口当たりのいい言い回しだな。もう
書くのはやめたまえ。

トニー　やめられません。

ヘンリー　やめられません。

ドクター　元気じゃないか。

トニー　でも、もうトラウマを物語にできなくなりました。

ドクター　あれだけ盛大に語ったのに。もったいない。

トニー　書き尽くしました。

ヘンリー　あなたは、ぼくたちを混乱させるばかりだ。

ドクター　ほほう。私のせいだと言うのか。

サラ　　もうひとつ質問。

ドクター　どうぞ。

サラ　　あなたは昔、絶大な人気を持った劇作家だった。違いま

すか？

ドクター 自分からはそんなことは言わない。

サラ あなたは絶大な人気を持った劇作家でした。

ドクター 過去形が泣かせるな。

サラ なんて書かなくなっただんです？

ドクター 無言。

サラ なんて書けなくなっただんです？

ドクター ナイーヴにならなければ、そんな質問には答えられないな。

サラ 一瞬ナイーヴになってください。

ドクター ナイーヴな言い方をすれば、私は資本主義の世界から降

りた。なぜか？ナイーヴな言い方をすると、商品にされる絶望。成功の果てのむなしさ。ナイーヴになった私は、自分が本当に書きたいことを書こうと思った。書き上げたものは、私の誇りにはなったが、商品にはならなかった。私はナイーヴにもそこでやっとな気がついた。商品にないものはこの世界では意味がないのだと。人々は私のことを忘れた。やがて、私は大物の殺し屋と出会った。わかるだろうか？物語殺しだ。大物の殺し屋の物語殺しというストーリーにつきあっているうちに、私自身が殺しの技術を習得してしまった。その先には無があっ

た。恐ろしいまでの虚無だ。私は一個の虚無になった。大物の殺し屋が私をそのように仕立て上げた。しかし、私は虚無に耐え切れなくなって、大物の殺し屋のもとからこの書齋に逃げ込んだ。殺しとは反対の役割を引き受け始めた。つまり、物語の医者だ。

トニー 大物の殺し屋…

ヘンリー その人は、誰なんです？

ドクター ヘルマン・プレミンジャーだ。

三人 !

ドクター 資本主義に絶望し、 Kommunismus に絶望したヘルマンは、新たな物語を探している。

ヘンリー …。

トニー …。

サラ …。

書齋の壁に巨大な穴が出来る。

穴の奥から老人がゆっくり姿を表す。ヘルマン・プレミンジャー。

ヘルマン 笑うことに飽きた。泣くことにも飽きた。感動すること

にも飽きた。飽きることに飽きた。おはよう、諸君。

書けたか？

ドクター 書けました。ドクター。

ヘンリー !

トニー !

サラ !

ドクターは原稿の束を出し、ヘルマンに近づく。

ヘルマン 見つかったか？

ドクター はい。

ヘルマン 何が？

ドクター いままでにない物語です。

ヘルマン それは何だ？

ドクター (穴を指し) この穴です。

ヘルマン わからんな。

ドクター わかっているはずですよ。あなたはここから出て来たのだから。

ヘルマン 君がそう書いたままで、トーマス。穴の奥には何があるのだ？

ドクター 奥の奥の奥に、あらかじめの意味をなくした世界が広が

っています。

ヘルマン 輝く闇に、深い光か。

ドクター やつと書けました。

ドクターは原稿をヘルマンに差し出す。穴の奥からアスラムが飛び出て来る。

アスラム まだ書けてないぞ、こいつは。

ドクターの原稿を自動小銃の銃口ではたく。

ドクターの手から飛び散る原稿。その美しさといったら…

ドクター …ありがとう。アスラム。

アスラム 耐えられねえ、おいらは耐えられねえ！この穴の奥だ

よ！てめーら、行けるもんなら、行ってみな。（呆然と
しているドクターを抱き抱えるようにして連れて、去
る）

ヘルマン 待ってますよ。書き上がるまでいつまでも待ってます。

だが、わたくしが待っていられても、世界のほうが待て
ないかも知れない。いざ、ゆかん。あらかじめの意味の
ない世界へ。（穴の奥に消える）

サラ 行くわ。(走る)

トニー サラ!

サラ 無重力空間からの脱出。

サラはあつと言う間もなく、穴の奥に消える。トニー、立ち上がる。

ヘンリー だめだよ、トニー。

トニー なんでだ？

ヘンリー だめだってば。この川は広すぎる。あちら側まで泳ぎ切るのは無理だ。

トニー 君の物語につきあえてっんだな。

ヘンリー 溺れるよ、トニー。

トニー おれは泳ぎ切る。

ヘンリー どうせ行った先は退屈だよ。

トニー 行ってみないとわからないよ。

ヘンリー いままでにない物語なんて、あるわけがないんだ。

トニー 書いてみないとわからないよ。

ヘンリー わかってきた。：おれはわかってきたよ。

トニー ヘンリー、離せよ。

トニー、ヘンリーをふりほどいて穴の奥に消える。

ヘンリー (穴に向かって) サラー！トニー！

9.

ドクターの書斎。ドクターが原稿用紙に万年筆で書いている。壁の穴はあるが、騒動の気配は消えている。ヘンリーが来て、座る。ドクター、書くのを止める。

ドクター …。

ヘンリー … 劇は成功しました。

ドクター …。

ヘンリー どこにでもある物語でしたが、大成功でした。

ドクター そいつあ、よかった。

ヘンリー これは謝礼です。(紙袋を置く)

ドクター 満足ですか？

ヘンリー はい？

ドクター 満足ですか？

ヘンリー　まあ、お客さんも喜んでくれましたし。

ドクター　ヘルマン・プレミンジャーは、満足しましたか？

ヘンリー　彼はどこにもいません。

ドクター　残念だな。

ヘンリー　どういう意味です？

ドクター　君はわからなくてよろしい。

ヘンリー　ほとんどわかったつもりですが。なめられたもんだ。

ドクター　すごい目をして。私は、また殺されるのかね？

ヘンリー　ぼくは今ここでは書いていません。とぼけないでくださ

い。わかっているんです。

ドクター　とぼけてるつもりはないがね。

ヘンリー　今現在のこの会話もあなたが書いてるものなんですよ

う？ストーリーはこうだ。「結局ヘンリーは、それまで

書いてきたものと変わらないドラマを書いてそこそこ

の成功を収める。」

ドクター　君、さっきは大成功と言いましたよ。

ヘンリー　大成功ですよ。

ドクター　幸せですか？

ヘンリー　そこそこの幸せですね。（苦笑して）これはサラの言い

草だ。

ドクター　もつと喜んでいいんですよ。

ヘンリー ぼくはまだ自分が本当に書きたいことが、わかっていない。

ドクター 成功した劇が無意味だと？

ヘンリー そうではありませんが、望まれて書いたものです。

ドクター 君は勝ったんです。資本主義の勝者。おめでとう。君を勝者に仕立てるのは私だ。

ヘンリー 今、「仕立てるのは私だ」と言いましたね。

ドクター …。

ヘンリー 尻尾を出しましたね。

ドクター …。

ヘンリー ずっとヘルマン・プレミンジャーにだまされてるという疑惑を抱いて、書いていました。それが違うと気がついたのは、サラとトニーが消える寸前でした。これは、最初からあなたの物語なんです。ぼくたちの書いた物語を巧妙に盛り込んで、あなたはあなたのストーリーを書き上げた。いや、今現在も書いている。

ドクター そう。君たちの書いたものを取り込んだ。もつと褒めて欲しいな。継ぎ目がわからないだろう。

ヘンリー ヘルマン・プレミンジャー。

ドクター …。

ヘンリー ぼくたちがここで見たヘルマン・プレミンジャーは、あ

あなたが書く世界にしか存在しない人間だ。ヘルマン・プレミンジャーなどというプロデューサーは実在しない。

ドクター 君は間違っている。

ヘンリー 往生際が悪いですね。

ドクター ヘルマン・プレミンジャーは、かつて若い私にドラマを依頼してきた。いままででない物語を書け、とね。私はその物語に苦しみ抜いた。呆れるほどの年数をかけて、呆れるほど何度も書き直した。さて、この結末は？私は書けただろうか？

ヘンリー (静かに首を横に振る)

ドクター その通り。私は何も書けなくなってしまった。自分のせいだ。私は自分のなかで資本主義に通用する物語を殺してしまった。だが、ヘルマン・プレミンジャーに劇作家生命を潰されたと思った私は、ヘルマン・プレミンジャーに殺意を抱いた。それを実行したのはアスラムだ。そう、アスラム。彼はもうひとりの私という物語だ。私は、アスラムを私と同じ若い劇作家として設定した。アスラムはヘルマン・プレミンジャーにずだずたにされて、私と同じようにヘルマンに恨みを抱いていた。

ヘンリー ぼくたちに何をさせたかったんです？

ドクター いままででない物語を書くことだ。

ヘンリー　それが書いていたら、どうするつもりだったんです？

ドクター　ヘルマンに渡すさ。

ヘンリー　…狂ってる。

ドクター　私のなかでヘルマンは生きている。書き上げた新作はヘルマンに渡す。

ヘンリー　それが適わなかったというわけだ。あなたもぼくたちも書けなかった。

ドクター　まだトニーとサラがいる。

ヘンリー　ふたりはどこに行ったんです？

ドクター　劇の通りだよ。（背後の穴を示し）この奥に消えたさ。私はやつと穴までは書けたというわけだ。

ヘンリー　この穴は何だ？

ドクター　君にはもう関係ないだろう。

ヘンリー　外界の現実への道筋というわけですか？

ドクター　違う。奥の奥の奥。あらかじめの意味のない世界。

ヘンリー　それはユートピア？デイストピア？

ドクター　どちらか決めるのは、行った者たちだ。

ヘンリー　サラとトニーが？

ドクター　わからないが、おそらく。

ヘンリー　あなたはなぜ行かないんです？

ドクター　私は負けたんだよ、ヘンリー。だが、資本主義に負けた

んじゃない。いままでにない物語に負けたんだ。私は虚無だ。虚無としてここに残っているしかない。

ドクター、原稿用紙に書き始める。

ヘンリー やつぱり、書くんですか？

ドクター ……（書いている）

ヘンリー 書き続けるんですか？

ドクター （書きつつ）穴の奥には、あらかじめの意味のない世界。

輝く闇。深い光。言葉は新たに生み出される。

穴の奥から泥だらけのサラとほこりまみれのトニーが出て来る。

トニー ここに出たか！

ヘンリー サラ！トニー！

サラ ヘンリー、まだここにいたの。

トニー 戻ってきちまった。

ヘンリー なにやっつてんだ？

サラ 書いてんだよ！

トニー 書くことがたくさんあり過ぎる。大忙しだよ。水を一杯

くれないかな。

ヘンリー、ふたりに水を与える。

サラ　行くよ、トニー。

トニー　ああ。

ヘンリー　待ってくれ。

トニー　いいか、ヘンリー。あっちじゃ、とにかく生きなきゃならないんだ。生きることが書くことなんだ。おまえも来いよ。

サラ　戻るよ、トニー。

トニー　ヘンリー、行くよ。

ヘンリー　おれをひとりにすんなよ。

トニー　来いよ。物語の戦場だ。

ふたり、穴の奥に消える。ドクター、書くのを止める。

ヘンリー　…。

ヘンリー、穴に入る。

ドクター　勝利を捨てるんですか？

ヘンリー あなたのだらまには、もうつきあいません。

ドクター それでよろしい。私はこの先は書けない。

ヘンリー (穴に入り) おーい、サラ、トニー。おーい。

ヘンリー、穴の奥に消える。

ドクターは定位置に座る。万年筆を取り、原稿用紙に書き始める。

ドクター 「ヘンリー、穴の奥に消える。男は定位置に座る。万年筆を取り、原稿用紙に書き始める。背後の穴が青白く光り始める。」

幕。

ドクター、万年筆を置く。

穴の奥から、ヘンリーの「おーい」と呼ぶ声がまだ聞こえている。

ドクター 終わらないぞ。なぜだ？

ヘンリーの声が尚も続いている。穴の光はさらに強くなり、書齋とドクターは見えなくなる。

そのなかで、複数のキー・ボードを叩く音が穴の奥のほうから聞こえて来る。次ぎにトニーとサラの声が聞こえて来る。

トニーの声 色を創る。

サラの声 音を創る。

トニーの声 名前をつける。

サラの声 名前をつけない。

トニーの声 輝く闇。

サラの声 深い光。

トニーの声 日が昇るといっても、光を表すわけではない。

サラの声 夜が明けないといっても、闇を表すわけではない。

ヘンリーの声 ここか！

トニーの声 遅いぞ、ヘンリー。

サラの声 さっさと座って。

ヘンリーの声 …ああ。

キー・ボードの叩く音。

サラの声 物語。初めて幸福を書く。幸福と書かずに幸福を書く。

トニーの声

物語。希望を初めて書いてみる。希望と書かずに希望を書き続ける。

ヘンリーの声

物語。世界の果てはもうすぐ近くだ。世界の果ては世界の今だ。だから、ぼくたちは…

幕。